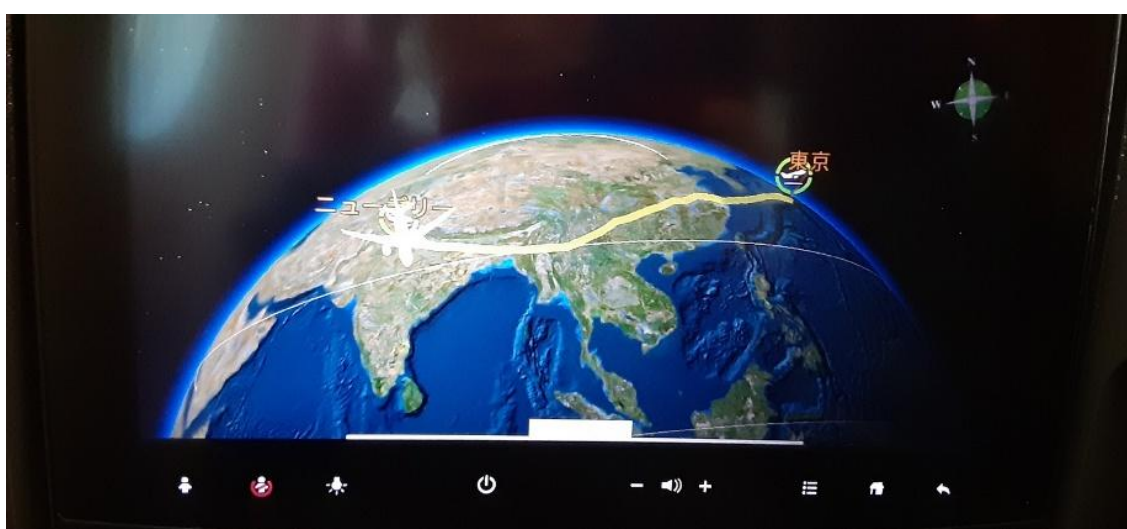


インド北部の旅 エッセイ

✿ インド入国



羽田空港で(わ! 寒ーい)と思った約 9 時間後、私達はデリーの空港に着いた。

飛行機を降りない前から長袖のシャツが暑く感じられたが、気温は機内放送によると 28 度ということで約 2.3 週間前の熊本を思い出した。

飛行機を降りて広い、広い飛行場をまるでウォーキングしているかのように(まだか、まだか)と思いながら歩くと、やっとイミグレーション(入国審査)にたどり着いた。

パスポート、入国カード、e—visa と手元に揃え、夫にもその指示を出し順番を待っていると、案外早く自分の順番が回ってきた。

どこかヨーロッパ系の風貌がある審査官が黙々と書類に目を通し、機械で顔認証し何の問題もなくパスした。

ただ、英語が得意でない夫のために私は一言残して、審査官の前を通過した。何とこれが意外な展開を生んだのである。

審査官は夫に何か言ったようだが、夫が分からなかったからか、後ろで待ってる私に次のように大きな声で言ったのだ。

// Is he your husband? // (この男性はあなたの夫なの?)

おまけに手招きもしている。

私はまた急いで審査官のもとに帰った。

// Yes, he is my husband. // (はい、そうです。夫です)と私が答えると、

// He is your husband. He is your husband. // (あなたの夫、あなたの夫)と何度も言うので、私も冗談に答えてあげたくなり、英語で次のように言った。

「どうして何度も尋ねるのかな？私ってそんなに若く見えるの？」

すると審査官は次のように答えた。

「あなたは16歳のように見える。」

夫と私は大笑いをした。

そして、このままで終わらせるわけにいかない私は次のように言った。

「インドは大好きになった！日本では誰もそんなこと言ってくれないから」

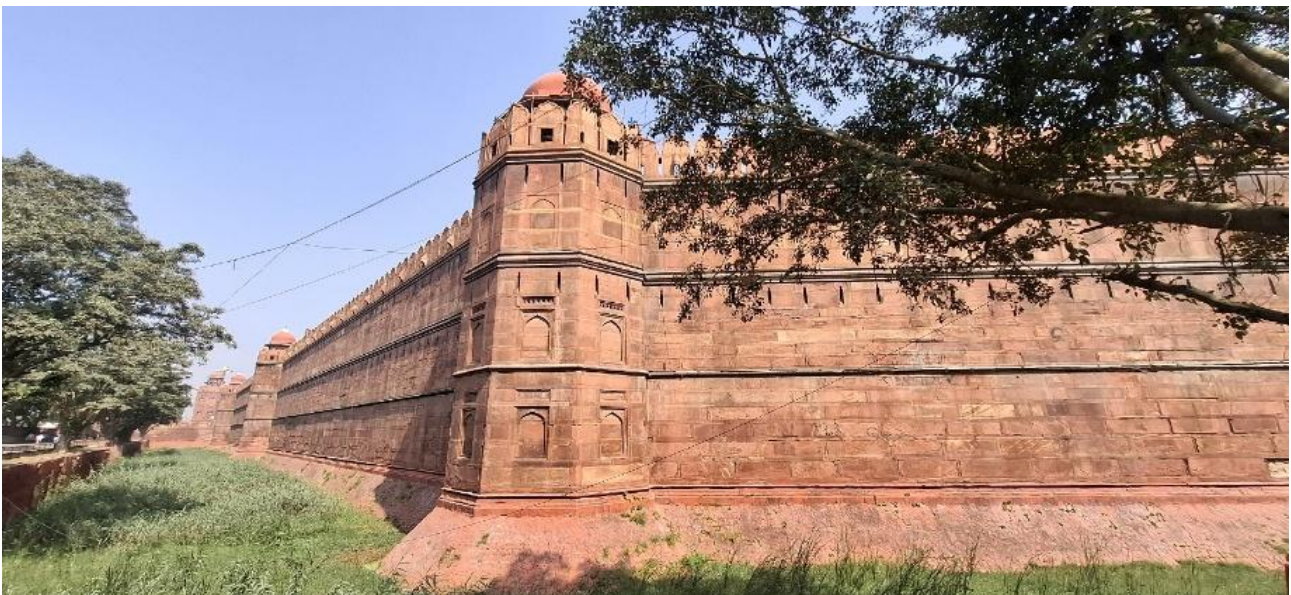
審査官は「私は言ってあげるよ」と胸に手を当てて言った。

そんな冗談の中で、夫の審査はあったのか無かったのか分からないうちに終わった。

最後に私が「Have a good evening」と言うと、審査官は心を込めたように、「サヨナラ!」と言ってニッコリしてくれた。

インド旅の意外な幕開けであった。

🌸 レッドフォート

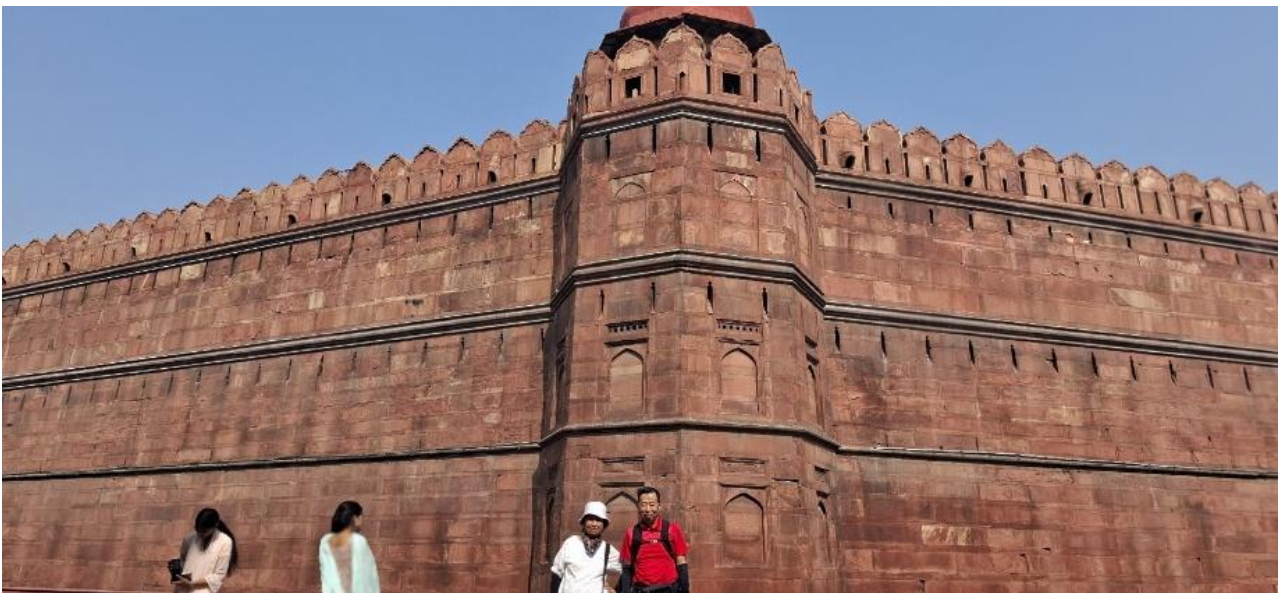


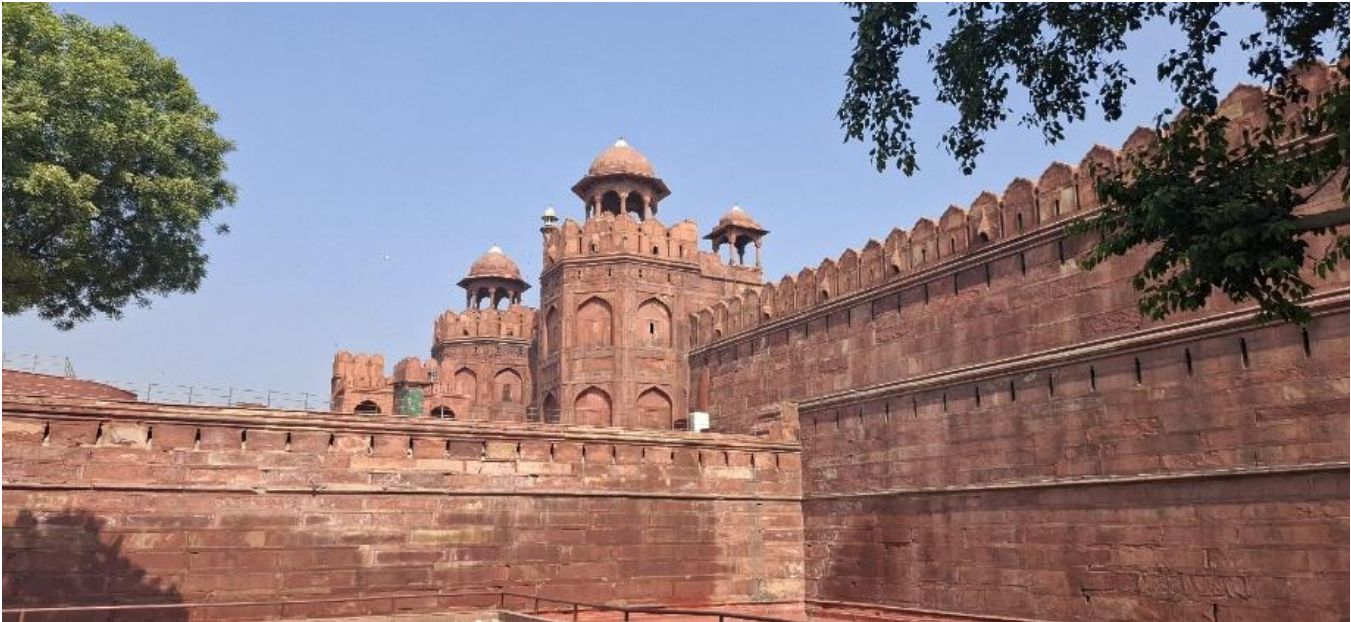
広いアパートメント形式のサービス付きの宿は、評価が 10 だけあってなかなか快適だ。

床もピカピカに磨いてあり、ベッドもキングサイズ。

全て揃えてあるキッチンは本当に便利だ。

そんな快適な宿で迎えたインドでの第一日目はデリー観光ということで、世界遺産の
レッドフォートとガンジーの墓所を訪れた。





レッドフォートはムガル帝国時代の1648年に作られた、赤い城と言われる要塞で赤砂岩で作られている。

古さをしのばせる要塞の赤さから歴史を感じる。

インド人にとっては非常に価値ある場所だそうで、国内からの沢山の旅行者で賑わっていた。

その後、ガンジーのお墓であるラージガートに行った。

ここは入っただけで聖なる場所だと感じた。

インドを独立に導いた偉大な指導者の墓所は、やはり特別な聖なる場所になっていて、モニュメントの近くになると、靴を脱がないといけなかった。

それにしても広大な敷地で、池のある庭園にも繋がっていて、

やはりインドは広い、また人間も多いと実感してしまった。





🌸 ゴルフ

昨日はハーフゴルフ 🏌️‍♂️ 🌻 🌊 をして楽しんだ。

すごく美しいコースで広い敷地にあるリゾートホテルのゴルフ場だった。

インドは豊富な労働力があるので、コースの手入れも機械ではなく、ほとんど人の手で成されているためか、とても美しいフェアウェイとグリーンが広がっていた。

キャディも一人雇った。まだ若者だが、ゴルフ経験が長いというのはすぐ分かった。また、ダフリで芝を剥いでしまうと、すぐさま土入れをして処理していて懐かしい感じがした。

このキャディはここのゴルフコンペで 73 というスコアで優勝したことがあるとのことで、ラインの読みも適格で私達のケアもうまく、ゴルフを熟知していると感じた。

また、「まっすぐ」「ナイスゴロゴロ」「すばらしい」とかの日本語がうまいので、「どこで習ったの」と英語で尋ねると、「この会社に日本人が一人働いています。その人に僕が英語を教えて、代わりに僕は日本語を教えてもらってます。」とのことで、微笑ましかった。

終わってから「チップは・・・」と言われたが、あいにく日本円しかない旨を伝えると、少し残念そうだったけど何も失礼な態度を取ることはなかった。



リゾート満喫できて素晴らしいゴルフ🏌️🌞💧でした。





また、この日の夜はカスミさん宅で、心のこもった手料理の和食をご馳走していただいた
久しぶりに胃に優しい食事で、日本食の良さを改めて実感した！



🌸 クトゥブ ミナール

今日は土曜日でカスミさんは手芸の発表会があるとのことで、代わりに旦那様がガイド役をしてくださった。自分達だけでも動けるんだが、運転手付きの車があるのは本当にありがたい。

旦那様は会社から別のドライバー付きの車を与えられていて、この日はその車で観光させていただいた。ここまでしてくださって感謝、感謝しかない。

休日のせいか、通りもいつもより若干混んでないようだった。

「今日は世界遺産クトゥブミナールとその近くにあるもう一つの世界遺産を見に行きます」

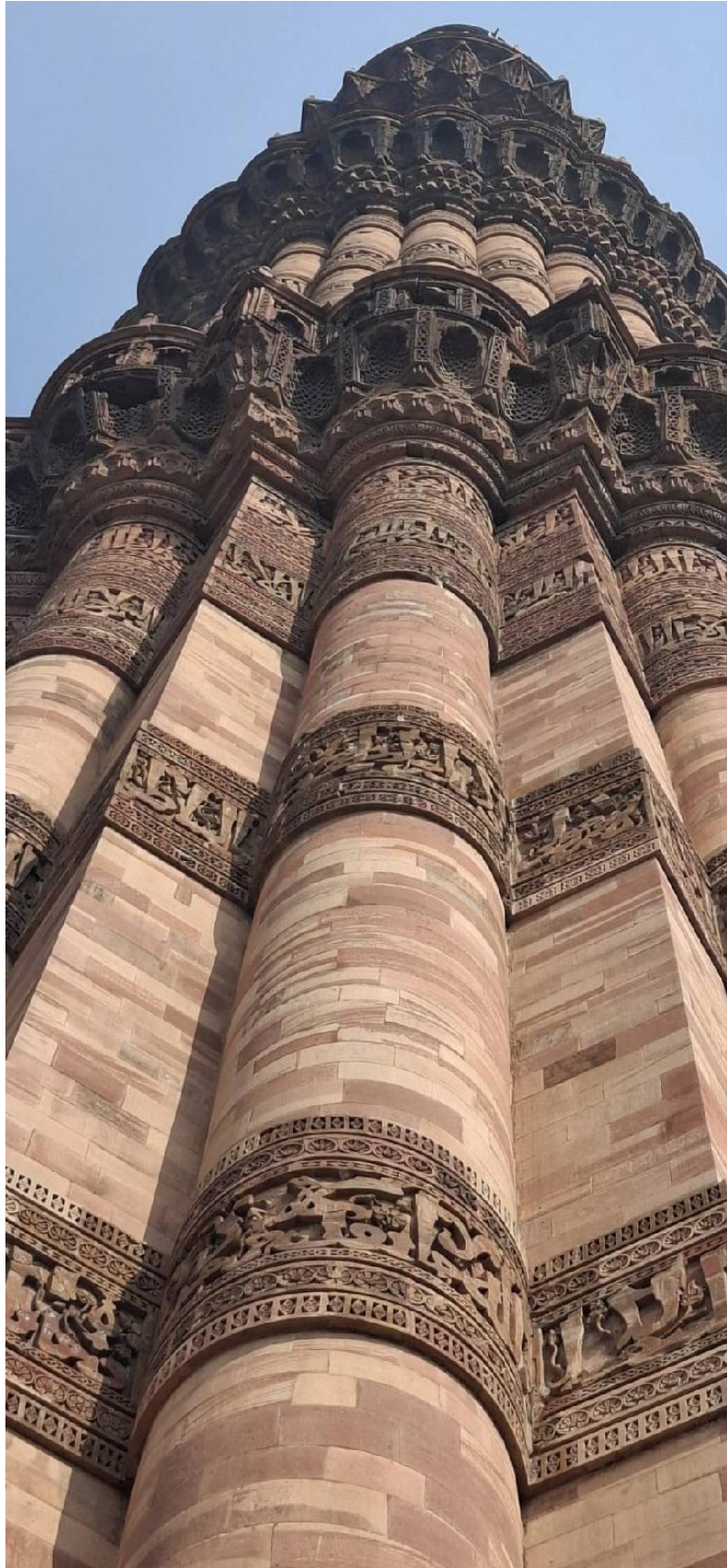
と旦那様が言われると、初めて聞くその名前に期待が膨らむ。

宿から約1時間で到着したが、入り口には学校の見学旅行かと思われる子供達がたくさん！ その遺跡の重要さが分かる気がした。



もう 1700 年は経っているほどの古さであるが、鉄の純度が 100 パーセントのため、未だに錆びていない驚異的なアイアン ピラーというのも珍しくて、その価値に納得した。





歩いていると美しくも古い、高い石の塔がいつも目に入り圧倒される。

これは 13 世紀中頃(約 75 年をかけて完成)作られた塔で、

高さは約 73 メートル(世界で最も高い煉瓦造のミナレットの一つ)だそうだ。

建設は、奴隷王朝の創始者クトゥブッディーン・アイバクで、この人は北インドでイスラム政権を確立した人物だそうだ。



古代の美しい遺跡の世界に浸った後は、わりと近くにあるもう一つの世界遺産で水の遺産でもある階段式井戸を見に、歩いて行った。

すぐ近くのはずが、いつの間にか裏道を通っていて、正規ルートの倍の距離を歩いてしま

った。でもその小路沿いにあった集落は、まさにイメージ通りのインドで、彼等の生活を垣間見ることができて興味深かった。



これは階段井戸と言われ、水の確保と貯蔵を目的とした構造物で、特に乾燥地帯で発達したそう。地面の深くまで掘られた井戸に、階段で降りていけるようになっているのが特徴だ。また単なる井戸ではなく、宗教的・社会的な集会の場でもあったそうで、多くは女性たちの社交場でもあり、地域コミュニティの中心的存在だったという。



古代に思いを馳せた一日だった。

❀ 伝統舞踊、歌

「グルگرام フェスティバルと言うのが昨日からあっていて、今日は午後 5:30 から民族舞踊などがあってるそうですよ、行かれませんか？」

とのカスミさんのお誘いに、二つ返事の"Yes"で行くことになった。

グルگرامはグルガオンと同じ都市名で、地域の祭りというところか。しかし会場はステージ発表だけのようだ。



会場に早めに行って席に着いていると、次から次と観客が増えていった。

夫婦連れが多く、皆お洒落をして入って来るのを見るのは、楽しく微笑ましいものである。特に女性の色々なサリー姿を見て、想像を膨らませるのもとても楽しい。

いよいよショーが始まった。

先ず伝統ダンスだった。民俗色の濃いダンスを美しいダンサーが続けて一人で 4 曲も、それも 1 時間ほど続けて踊ったので驚嘆してしまった。

次は民俗楽器の演奏と歌う、古典の歌であった。



古代から伝わる民話を歌で伝えるのだそうだ。これも1時間ほど休みなく歌うのだからすごいエネルギーと情熱である。





舞踊にしろ、歌にしろ、言葉が分からないため内容はつかめないが良いものは良い。

心に訴えかける何かを持っていて、引き込まれてしまった。

芸術は時と言葉を越えると実感した。

🌸 ジャイプール

昨日からジャイプールに来ている。

グルガオンから車で約 4 時間かった。

でも良かったほうで、グルガオンからジャイプールに伸びる高速道路が約 7 年前にでき

たおかげで、渋滞から解放された本来の高速のスピードで走ることができた。

車窓にはどこまでも、どこまでも続く、山が全くない広大な平野の景色を堪能できた。しかもその平原のほとんどは農地だった！

調べてみると、インドは国土の約半分が農地でGDPの17%は占める重要な産業だそう。また米や小麦の生産量は世界第2位だそうで、これも全く知らなかったのが驚いた。



日本のような耕作放棄地は全く見えない。

また、日本と大きく違う田園風景は農業機械がほとんど見えないということだろう。たまにトラクターが耕作しているのを見かけるだけで、あとは人間が手作業をしているのが見えるだけだった。

ここにも豊富な農業労働力を垣間見ることができた。

もう一つ大きな違いに気がついたのは夫であった。

「どうしてあんなに木が多いのだろう？ 日陰があると作物はよく育たないのに、、、」

夫が調べたところによると、農地に低い木が点在するのは主に「アグロフォレストリー」（農林複合経営）と呼ばれる伝統的かつ現代的な土地利用システムだそう。

このシステムには、農家の生計向上と環境保全の両面で多くの利点があるそう。

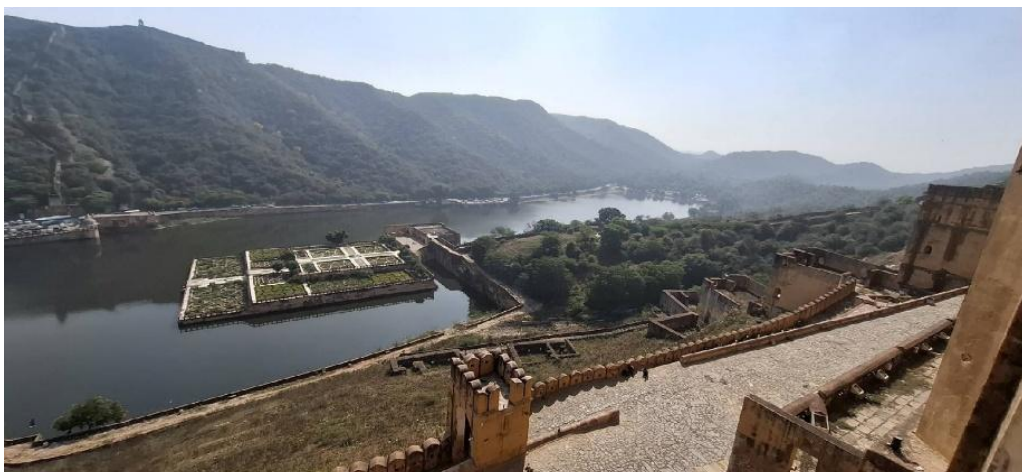
- ・ **多様な林産物の供給源:** これらの木は、農家にとって重要な燃料材 (薪)、飼料、建設資材、そして換金作物としての木材を提供する。
- ・ **農業生産性の向上:**
 - 木の根が土壌の浸食を防ぎ、落葉が有機物として土壌肥沃度を高める。
 - 作物や家畜に日陰を提供し、特に暑く乾燥した地域で過酷な気候を和らげるのに役立つ。
 - 強風から農作物を守る。
 - 木材やその他の林産物からの収入が農家の経済的な緩衝材となる
- ・ **生物多様性の維持:** 農地内に木があることで、さまざまな動植物の生息環境が提供され、生物多様性の維持に貢献する。

こんなに利点が多いアグロフォレストリーは政府も支援している。2014 年に国家アグロフォレストリー政策を導入し、気候変動の緩和と農業生産性の最大化を目指して、この慣行を積極的に推進しているという。

とても興味深い農業政策で、頑張ってもらいたいと思った。

そんなことを調べたり、考えたりしているうちにジャイプールのお城が見え始めた。

(アンベール城)







(風の宮殿)





(水の宮殿)





水の宮殿を見ていると、インド人の中学生と見える女の子が声をかけて来た。

「すみません、一緒に写真を撮っていいですか？」

インドでは日本人と身近に接することがまだ無いようで、こんな風に声をかけられることも多い。

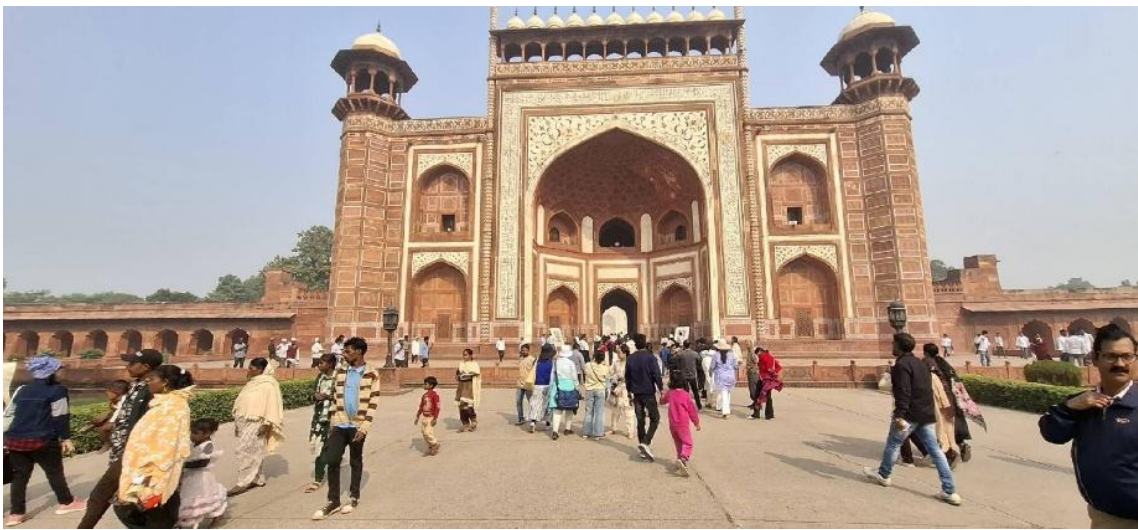
ちょっと恥ずかしいが、昔の日本を思い出してしまった。

❀ タージマハール

今日(11月12日)はいよいよタージ・マハルに行く日だ。

今回の旅の最大の目的の一つで、本当に楽しみである。

昨日のうちにジャイプールから移動して来て、タージ・マハルのすぐ近くに宿を取ったので歩いて行くことができた。



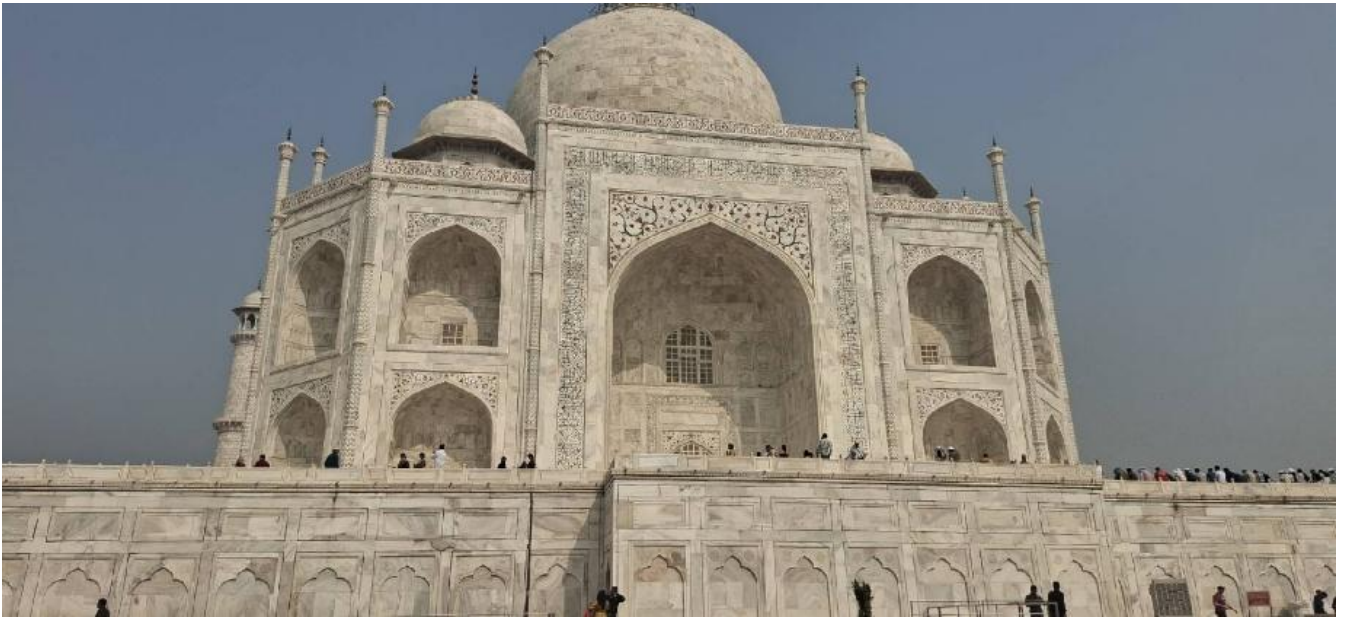
ホテルの前は個人の色々なお店が並び、ウンザリするほどの客引きの声かけを無視して、ひたすらに歩くこと15分。

いよいよタージ・マハルの壮麗な門が見えてきた。



ボディチェックやバッグの中まで一応調べるのは、2日前に起きたテロの爆破事件の影響か。

チェックを無事に通過しゆっくりと歩みを進めると、目前に太陽の陽に輝く真っ白なタージ・マハルが姿を現した！



写真では何度も見たことはあるが、その崇高な芸術性と美しさは見る者を圧倒する。やはり本物でないと味わえない感覚だ。

完璧な左右対称、どの角度から見ても全く同じ総大理石作りという贅沢さ、大理石には象嵌細工が施され、花やアラビア文字(コーランの詩句)が美しく描かれている。

庭園もイスラームの「天国の庭」を表す庭園形式で構成されており、中央に伸びる青い池が白い大理石とコントラストをなしている等、魅力は数え切れない。



この建物の中心、そして左右対称の中央線の通る所に王と王妃のお墓が静かに並んでいた。

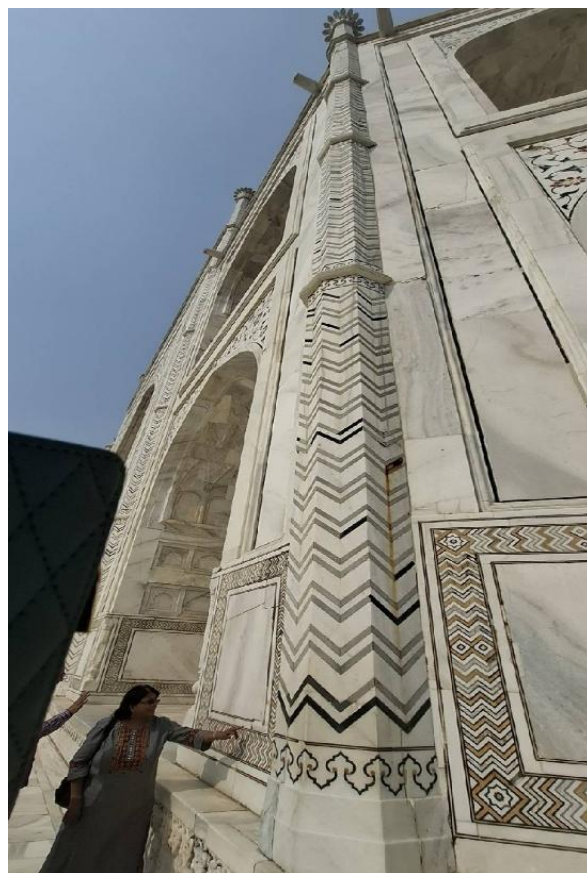
ここでこのお二人についてのストーリーを紹介したい。

ムガル帝国の第五代皇帝シャー・ジャハーン王は、王妃ムムターズ・マハルをこよなく愛していた。王妃は側近として政治的助言を与え、戦地にも同行するほどの信頼を得ていた。

ところが、ムムターズ(宮廷の光という意味)は14人目の子を出産中に亡くなった。

深く悲しんだ皇帝は「この世で最も美しい墓を建て、彼女の思い出を永遠に残す」と誓うのだった。

その結果、誕生したのがタージ・マハルなのだ。

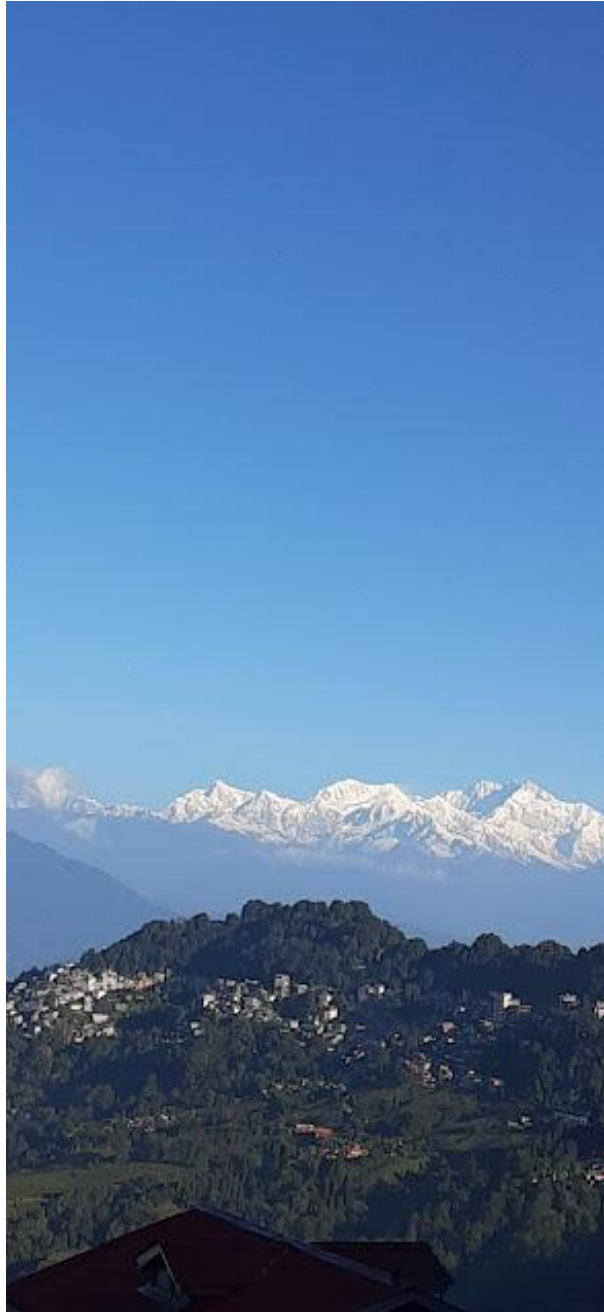


タージ・マハルは「永遠の愛の象徴」と呼ばれ、世界中で愛の聖地として尊ばれているゆえんである。

🌸 ダージリンの歴史

昨日(13 日)から北部のダージリンに滞在している。

ホテルの窓からは雪をかぶったヒマラヤの山々が、白く輝いてそびえ立っている。そう、ここはヒマラヤ山脈の足元なのだ。



ここでダージリンの歴史を紐解いてみよう。

1835年、イギリスは避暑地として利用するために、当時あったヒマラヤ国からダーズリンを「譲渡」された。しかし実際は半ば強制的に獲得したとみなされてもいる。

それ以来、イギリスの行政官や軍人が夏に暑さを避けるため滞在するようになり、ヨーロッパ式の建物や教会、学校が建てられた。

そしてダーズリンは「ヒマラヤの女王 (Queen of the Hills)」と呼ばれるようになったという。







昨日ランチを食べに地元で人気のチベット料理のレストラン行っただが、途中で古いイギリス式レンガ造りの建物の学校があった。植民地時代の名残りだろう。

また、昨日利用した超距離タクシーの運転手さんはクリスチャン(キリスト教徒)で、ダーズリンにはクリスチャンが多いそう。これもイギリス統治の影響か。

ダーズリンと言えは紅茶である、私も好きだ。

どうしてここが紅茶の名産地になったのだろう。

その当時イギリスは中国への依存を減らすため独自の紅茶生産地を探していたという。

どこか現代にも見られる国策で面白い。

ダーズリンは気候がお茶栽培に適し、後に大規模なプランテーション化へと進み、イギリスは茶の輸出で大きな利益を得ていく。また、多くのネパール系住民が労働者として移住し、今のダーズリンの民族構成の基盤が形成されたそう。



歴史は流れ1947年にインドが独立すると、ダーズリンはインド領となり今に続いている。

✿トイトレイン

1800年代も終わり頃になると、イギリス統治下のインドのダーズリンは避暑地 (Hill Station) として、人口も増え交通の改善が必要になった。また、茶葉産業も急拡大し効

率的な輸送が急務となっていた。そんな中でヒマラヤ鉄道の建設が計画されたのだった。



歩いたりタクシーに乗ったりしていると、幅のせまいレールが町中の狭い道路の片すみの至る所を走っている。また時には横断もしている。もちろん遮断器はない。

線路は単線で、トレインはそんなに頻繁には走らないので、人が線路の上を歩くのも全く普通のことなのは、驚きとともに微笑ましい。

ダーズリンは山岳地帯にある町で急勾配も多く、ヘアピンカーブなどを克服するためにループ、ジグザグ(スイッチバック)など、当時としては最先端の世界的に珍しい構造でできている。正式に開業されたのは1881年だそう



そのトレインは車両や機関車が非常に小さく、山岳地形をのんびり走るため、おもちゃの汽車みたいだ とイギリス人が呼んだのが始まりで、「トイトレイン」と呼ばれ、1999年に世界遺産に登録された。



実はこのトイトレインに乗るのが今回のインド旅行の最大の目的だった。現地滞在させて
るカスミさんのご協力のおかげで実現できて本当に嬉しい。

「ポーポー」とオモチャのような音の汽鳴らしながら、狭い道路の片すみを走ったり、道
路を横切ったりして、蒸気でのんびり走るトイトレイン。2連の車両は世界各地からの観光
旅行者で満席だ。しかし、どうも日本人は私達3人だけのようだ。



車窓には白くそびえるヒマラヤの山々が見えたり、みやげ物売る露店が見えたり、谷に沿って立てられているたくさんのホテルが見えたりで、飽きることは無かった。イギリス統治時代のダージリンに思いを馳せて、時が流れて行った。

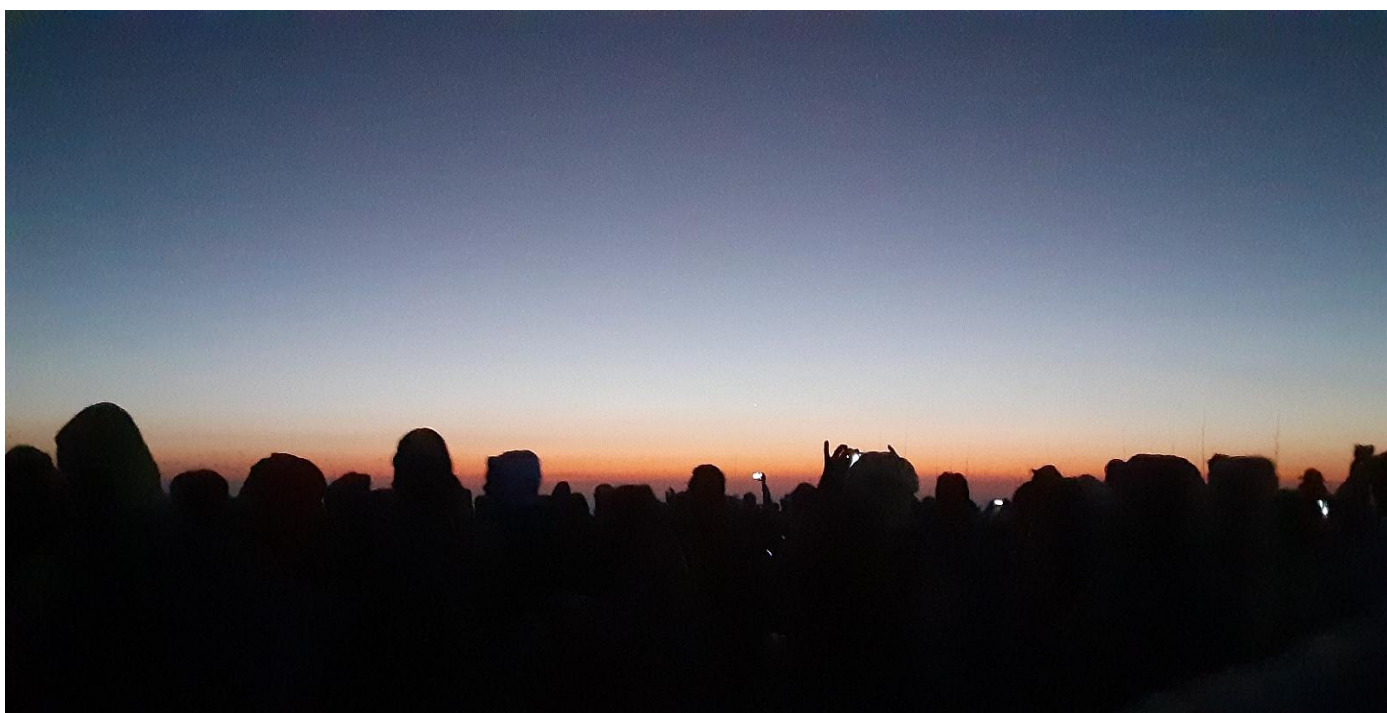
🌸 日の出とヒマラヤ

ダーズリンに来たら逃せない場所として、日の出に照らされるヒマラヤが見える展望スポット、タイガーヒル(Tiger Hill)がある。

標高 約 2,590 m (ダーズリン市街より約 300m 高い) の所にあるので、タクシーで行くことにした、というかタクシーしかないのである。または現地ツアーはあるだろうが、個人旅行としてはタクシーが好ましく価格も手ごろだ。

カスミさんの努力で割安でタクシーが手配できた。

出発したのは朝 4 時と、日本の私では考えられない出発時間なのだが、そこは外国時間
というか、外国では不思議と平気な私である。



気温は 5 度ぐらいで、寒さに身を縮めながらタクシーに乗り込むと、窓が空いている！

「すみません、寒いので窓を閉めてもらっていいですか」と夫が言うと、「窓を全部閉めると私が眠くなるんですよ～、それと暖房もありませんので ok?」との答えで、運転手の後ろに座った私の前の窓は空いたままで現地まで走った。確かに寒かったが、それより眠さが先に立ちウトウトしているうちに現地に着いた。



ヒルの上は日の出もヒマラヤも見渡せそうだ。しかしもう人、人、人でいっぱい！
まだ見えないヒマラヤの位置を憶測で定めてスマホを用意して、日の出を待った。

日の出が少しづつ近付くと、空に浮かんでいた雲らしき物が周囲の空の色の变化と共に、山々の形を現していった。

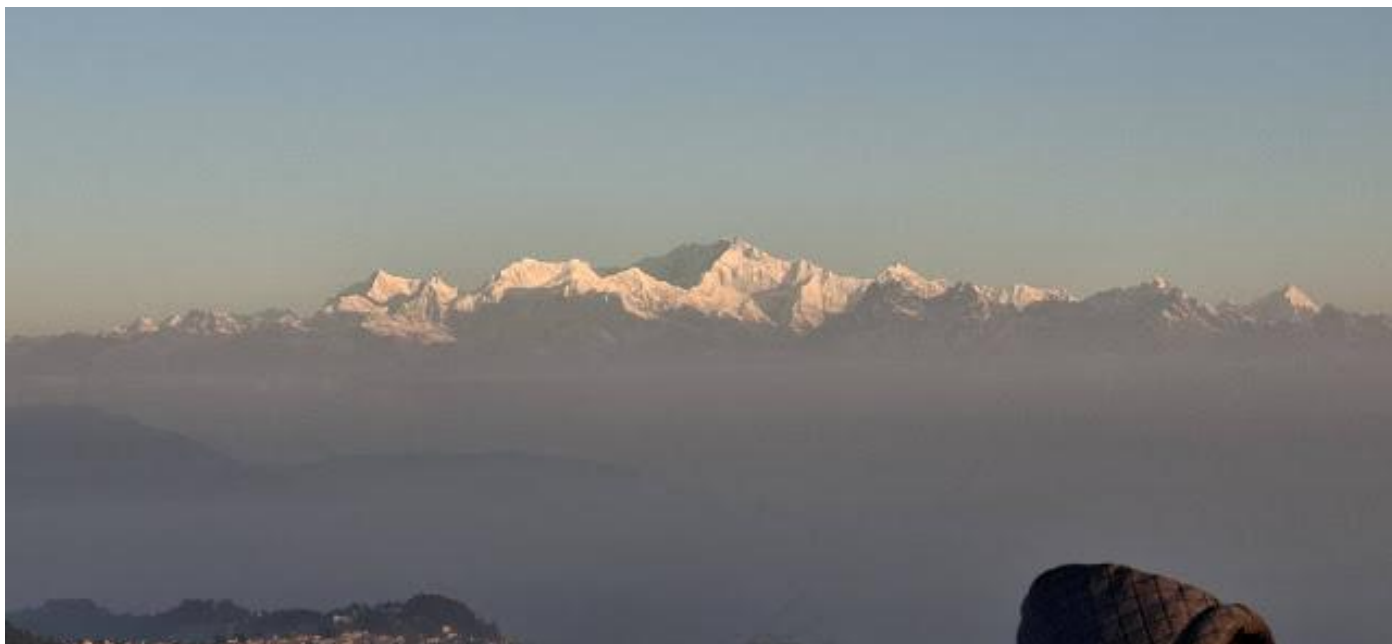
うすい水色からうすい黄色、そしてうすい桃色から少し濃い桃色へと変化していく。

最後には日の出に輝くヒマラヤの山々、そしてその中で最も高いカンチェンジュンガ(世界3位の高さ)がひとときわ崇高に輝いている。

また少し左に離れた向こうには、エベレストも顔を出している！



こんなスペクタクルな自然の妙に、夫婦で身を置くことができて本当に幸運であった。



★チベット難民自立センター

個人の外国旅行に予期せぬことは付き物である。

ダーズリン滞在の最後の日、私達はまた前日と同じタクシーを1日ハイヤーして、紅茶園やロープウェイ、動物園を訪れることにした。

先ずアジアでも最も長いものの一つと聞くロープウェイに行ったが、これまた長蛇の列で「2 時間待ち」と言われた！

「切符だけ買っというて後で乗りにきては？」と尋ねたが、「いつ来ても 2 時間待ちです。午前 6 時ぐらいからみんな並んで切符を買ってます。」

との答えだった。これも 12 億という多人口のなせる業か？この人気度か？よくは分からない。仕方ないのでそこに広がる素晴らしい山岳風景を眺めて、想像力で乗ったことにした。





運転手は気の毒がってか、「では代わりにチベットの難民キャンプに行きませんか？

そこだけにしか売ってない手芸品や美しい織物で人気があるんですよ」

「え？！ダーズリンにチベットの難民キャンプ？！」

と私達は意外な展開に驚いた。

運転手の説明によると、1959年に中国はチベットに侵攻して支配下に置いた。その時に
ダライ・ラマに続いて、多くのチベット人が自由と平和を求めてヒマラヤ山脈を越え、ネ
パールやインドへ亡命したそうだ。。

ダーズリンは、中国チベット自治区に接するヒマラヤ山脈の 亡命ルートの終着点の一
つとなり、難民が住み着き易かったという。

最初は10数人のチベット人が住み着いたが、1964年頃に土地がインドから提供され、
難民が自立して生計を立てられるよう、織物や工芸品の制作・販売などを行う職業訓練
施設を兼ねた「チベット難民自立センター」が設立されたそうだ。

同じような難民支援センターはインド各地にあるという。



たまたまこの日は日曜日で、たくさんのお店が閉まっていたが、それでも僧院にお参りしたり、みやげ物店で高度な技術で織られたショールやカーペットなどが並べられていた。売上金は難民センターの運営に回されるということで、寄付のつもりで美しい箸セットを購入した。

お腹もすいたので、そこにある小さいレストランに入った。

チベット伝統料理のスープ麺のトウクパを注文した。

店の主人は私達がトウクパを食べてる横で色々と話してくれた。

「ここは親達が難民として逃げてきた時は山だった。親達が苦労して住める場所にしてくれたんだ。でも当時の親達は亡くなってしまい、若者達はここを出ていくし、店もだいぶ減ったよ。ここには彼等の求める人生はないからね、仕方ないよ」

「ダライ・ラマは知ってる？ こうやって平穏な暮らしができてるのは、全てダライ・ラマのおかげなんだ！」と、壁に貼られたダライ・ラマの大きなポスターを見ながら感慨深く話す店主に耳を傾けつつ、私達はトウクパのスープをすすった。

★紅茶園

チベット難民自立センターの後は動物園に行った。

雪ヒヨウ、シベリアタイガー、白いベンガル虎、レッサーパンダ等、なかなか見応えがあった。





その後は HAPPY TALLEY TEA GARDEN (ハッピーバレー茶園)を訪れた。

ここはダージリンで 2 番目に古い茶園だ。1854 年に設立され、長い歴史を刻んでいる。

標高は約 2,100 メートルで valley(谷)というだけあって、かなりの傾斜の深い谷に茶園が広がっている。



広い茶園は日本と違い線上に並んで植えられていない。ただ隙間なく植えてある感じた。

これは機械を使わない人力中心だからできることと言える。

また、2007 年に新しい所有者が変わってから有機栽培に変わったそう。

到着してしばらくすると工場のガイドツアーが始まった。稼働中の工場が博物館となっていた。あいにくこの日は日曜日で作業はお休みで見れなかった。ガイドツアーは(もうこれで終わり?)と思うくらい短かったが、とても興味深いものだった。

ガイドツアーの後は試飲と販売で、これは世界共通だ。

2000 メートルを越す高地で、人力による有機栽培された紅茶は柔らかい感じで、香り高く、生産量が少ないからか高価である。

しかし外貨なので感覚が鈍っているせいか、抵抗なく購入した。

✿ インドの食べ物

インドから帰国して3週間余りが経った。

この間、多くの人から受けた質問が「インドの食べ物はどうでしたか？」である。

この質問はもちろんインドへの興味そのものとも言えるが、背後にあるのは日本のグルメ指向というか、「グルメ時代」と言われるように、「おいしい食べ物を求める」時代を表わしていると思う。

美味しいもと言えは、インドは先ず「カレー」である。

インド旅行中は本当に多くの種類の本場カレーを食した。キーマ、ダル、バターチキン等々カレーファンにはお馴染みの名前が並ぶ。

インド北部のカレーは濃厚でクリーミーな味が特徴だとか。辛さも選べはするが、最も低いレベルの辛さを注文しても、こちらで言えばレベル2ほどはあると思った。

そのせいかも知れないが、2日も続けて毎回カレーを食べていると、胃が重くなってくる。

きっと本場のスパイスに慣れていないからだろう。

しかし2日ほどブレイクを与えると、また美味しく食べられた。





カレーと一緒に食べるのは、ご存知のナンは多いのだが、白米（日本の米とは種類が違う）やチャパティ（小さいナンのようなもの）、ビリヤーニ（炊き込みご飯に似ている）等がある。

ナンは薄く焼いてあってとても美味しかった。またドーサ(米の粉を薄く焼いたもの)も初めて食べたが、とても美味しかった。ドーサは朝食時には無料で注文できるので、よく食べた。

余談だが、オムレツもとても美味しかった。これも朝食時には無料で注文できたので、気に入りにってしまった。たぶん鶏が外で飼われていて、自然な卵だからだろうと思う。

ダージリンに行った時は、代表的なチベット料理の「モモ」が美味しかった。小籠包のような肉団子で、油で揚げたものや蒸したものがあつたが、両方ともとても美味しかった。

思い切って入った家族経営の小さな食堂でも「モモ」を食べた。この時は、女将さんや息子さん達と楽しく交流もできて、忘れられない思い出の1ページである。





ドーサ

